

平成18年度病害虫発生予察特殊報第2号

平成18年11月24日
鳥取県病害虫防除所

1 病害虫名 トマトすすかび病 (*Pseudocercospora fuligena* (Roldan) Deighton)

2 発生作物名 トマト

3 発生確認地域 鳥取市、米子市

4 発生確認の経過

- (1) 平成18年9月に、鳥取市内の施設栽培トマト(葉かび病耐病性品種)で、トマト葉かび病とよく似た病斑を生じる症状が見つかった。病斑上に形成された分生子を光学顕微鏡下で観察したところ、トマト葉かび病菌とは異なる形態の細長い分生子を確認したため、三重大学生物資源学部生物圏生命科学科の中島千晴助教授に同定を依頼したところ、トマトすすかび病であることが確認された。
- (2) また、その後の調査において、米子市内の施設栽培トマト(葉かび病耐病性品種)でも、2ほ場で同様の症状が見つかり、分生子の形態的特徴から、本病と診断された。このうち1ほ場では、トマト葉かび病とトマトすすかび病が混在して発病していた。
- (3) トマトすすかび病は、平成8年に宮崎県で発生が確認された後、これまでに6県1府で発生が報告されている。症状がトマト葉かび病と酷似していることから、これまで混同されていた可能性がある。

5 病徴

- (1) 初め葉裏に不明瞭な淡黄緑色の病斑が現れ、やがて灰褐色粉状のかびを生ずる。病斑は次第に拡大して、円形あるいは葉脈に囲まれた不正形病斑となり、灰褐色~黒褐色に変わる。葉の表面には裏面よりやや遅れて不明瞭な淡黄褐色の病斑を生じ、かびを生じるが、裏面に比べて少ない。
- (2) 病徴はトマト葉かび病に酷似しており、肉眼での判別は困難であるが、分生子を光学顕微鏡下で観察すれば形態で容易に判別できる。

6 病原菌の特徴

- (1) 糸状菌の一種で、不完全菌に属する。分生子は淡褐色、鞭状または円筒形である。大きさは不同で $13.3 \sim 170.3 \times 2.7 \sim 5.6 \mu\text{m}$ 、0~15個の隔壁を有する。菌の生育適温は26~28℃、分生子の形成適温は18~22℃である。また、分生子の発芽適温は26℃付近である。
- (2) 被害植物の残渣で越冬し、翌年の伝染源となる。多湿条件で発病しやすく、密植、過繁茂、換気不十分の施設栽培で発病しやすい。

7 防除対策

施設栽培では、密植、過繁茂、換気不足で発生しやすいので、多湿にならないように管理する。発病葉、被害残渣は施設外に持ち出し、適切に処分する。



写真1 すすかび病の症状（葉裏）



写真2 すすかび病の症状（葉表）



写真3 混在している病斑
（中央左：すすかび病、中央右：葉かび病）

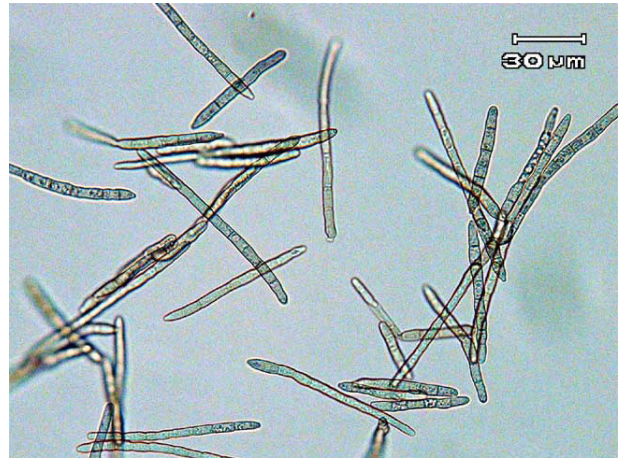


写真4 トマトすすかび病菌分生子